

---

# ポケットモンスターライト&ダーク&カオス

狂愛花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケットモンスターライト&ダーク&カオス

### 【Nコード】

N2312T

### 【作者名】

狂愛花

### 【あらすじ】

アニメ・ポケットモンスター・ベストイッシュから二年後の話。マサラタウンのオーキド研究所で今までサトシに係ってきた人達を招いてパーティーを開く事になった。

しかし、パーティーの主役であるサトシが何時までたっても研究所に姿を現さないでいる最中研究所上空にロケット団の戦艦が現れ研究所のポケモン達を奪おうとした瞬間・・・！  
一体どうなるのか！？

## 第0話 マサラタウンのサトシ（前書き）

サトシ「ハーレム

嫌いな方は、今すぐお逃げください。

## 第0話 マサラタウンのサトシ

此処は、ロイヤル地方にあるとある山。

その山の頂上では、今まさにポケモンバトルの真っ最中であつた。

少年「くそ！ポニータ、大文字！」

少年は、自分のパートナーであるポニータに相手のポケモンへの攻撃の指示を出した。

？「ユキノオー吹雪で応戦だ！」

相手も自分のポケモンに指示を出した。

ヴォカン！！

ポニータとユキノオーの攻撃がぶつかり激しい爆発が起きた。

ポ「ヒイー！」 ユ「ユキ！」

爆発に巻き込まれて二体のポケモンは、煙の中に消えた。

煙が晴れるとそこには、戦闘不能になつているポニータと威風堂々と仁王立ちしているユキノオーが姿を現した。

少年「ポニータ！」

？「大丈夫だったか？」

相手が少年のポニータを気にかけて近ずいて来た。

少年「大丈夫です。心配してくださつて有難う御座います。でも、強いですねゝあなたのユキノオー。」

？「そりゃゝ一緒に戦つてきた仲間だもんそれに、何よりこいつが頑張つてくれたからかな！」

少年「そうですか僕のポニータも褒めてあげよ。」

そう言つて少年は、ポニータを撫でながら「有難う」や「よく頑張つた」など感謝の気持ちをポニータに述べている。

？「君のポニータよく育てられてるねそれに君によく懐いてる。」

少年「そ、そうですかやつたな！ポニータ」

？「・・・」

少年「な、なんですか？」

相手がジーと少年を見ているのにきずいた少年は、相手に話しかけた。

？「大丈夫だよポニータが風邪をひいたのは、君のせいじゃないよ。」

少年「え！？」

？「もう、悔むことわないよ。ポニータは、君を恨んでないからもつと心から楽しむバトルをしなよ。」

少年「なんであなたがそのことを！？」

？「ふふ、何でだろうね？」

そう言うとき突然吹雪が吹いて相手の姿がハッキリと認識できない状態になった。

少年「あ、あなたのお名前は？」

少年がそう言い終わると吹雪はおさまりそこにいたはずの相手は、居なくなっていた。

しかし何処からともなく声が響いた。

？「サトシ、マサラタウンのサトシだ」

少年「マサラタウンのサトシ・・・」

少年は、空を見上げながらそう呟いた。

t o b e c o n t i n r d e

## 第0話 マサラタウンのサトシ（後書き）

感想をお待ちしております。

## 第一話久しぶり！（前書き）

第二話やっとかけました>|<  
では、どうぞ！

## 第一話久しぶり！

ロケット団が、壊滅してから一年の月日が流れた。

ロケット団を壊滅させようと動いてたジムリーダーや四天王とチャンピオン、フロンティアブレン達もそれぞれの職務に戻って行った。

しかし、今まさに新たな組織が動き出そうとしているのにまだ、誰も知らない。

ところ変わって此处、オーキド研究所では、ちょっとしたパーティーが開かれていた。

？「おい！シゲルー！」

シ「ん？おお！タケシ！久しぶりだな！」

タ「ああ、久しぶりだなシゲル」

シ「弟達は、元気か？」

タ「ああ、みんな元気だ。そう言うシゲルは、どうなんだ？」

シ「もちろん元気さ自分の健康管理位出来ないで科学者も医者も務まらないだろ？」

タ「それもそうだな」

？「二人とも相変わらずね」

二人が談笑していると二人に話しかけてくる女性が居た。

シ・タ「カスミ！！」

カ「タケシ、シゲル久しぶりね！」

タ「久しぶりだなカスミ！随分見ないうちに女らしくなったじゃないか。」

シ「ハハハ、言ってる」

カ「何よそれ」

それから数分後パーティーに招かれた人達が集まってきた。

ダダ一人を除いて・・・。



パーティーが始まってから数分後異変が起きた。

シロ「・・・」

ヒ「シロナさんどうしたんですか？」

シロ「雲の上に何かいる。」

ヒ「え？」

ヒカリは、シロナの言っていることがよく分らないでいる。

と、次の瞬間、上空から巨大な網が現れ研究所のポケモン達を捕えた。

シ「一体何なんだ！」

？「何だかんだと聞かれたら」

？「答えないのが普通だが」

？「？」「まあ、特別に答えてやろう」

カ・タ「ヤマトにコサンジ！」

コ「コサブロウだ！いい加減覚えろ！」

ヒ「ロケット団は、壊滅したはずだろ！なんでまだお前たちが出てくるんだ！」

ヒロシがそう言うのと同時にパーティーに来ていたトレーナー達やジムリーダー達がモンスターボールに手をかけた瞬間ロケット団が謎のボタンを押したと同時に草むらから謎の球体が現れた。

シ「なに！モンスターボールが反応しない！」

ヤ「その球は、特殊な電波を放ちその電波の範囲内での電子機器の使用は、不可能なのよ。」

コ「もちろん、モンスターボールもな。」

ヤマトとコサン「コサブロウだ！」もといコサブロウは、高笑いを上げながら撤退の準備をしていた。

マ「待てえ！ガア！」

ハ「マサムネ！大丈夫！？」

マ「な、なんだあ？何かにぶつかったみたいだけど何もないぞ？」

ヤ「ああ、言い忘れてたけどその球壊さないと外に出れないからと言っても破壊光線でもビクともしないからそう簡単には、壊れない

けどな！ハハハハハ！」

ジ「クソ！如何すりやいいんだ」

コ「最後に一つ教えてやるよ確かにロケット団は、壊滅したが、ロケット団よりも遥かに強大な組織が動き出したんだよ！」

ヒ「な、何だつて！？」

ヤ「じゃあね」

ヤマトとコサン「ブロウ！」が空高く飛び立とうとしたその時。

？「トロピウス！ソーラービーム！」

「クワアー！」

ドゴオン！

シゲル達を捕えてた球体が一瞬にしてスクラップになったと同時にポケモン達を捕えてた網もトロピウスの葉っぱカッターで切って救出した。

ヤ「もーお！一体どこの誰よ邪魔してくれたのは！？」

？「俺だ」

コ「ん？ああ！お、お前は！？」

コサンジ「コサブロウだつて」基、コサブロウは、声のした方に目を向けると帽子を目深にかぶった長髪の青年がトロピウスの上に乗ってコサブロウの方を見ていた。

ヤ「あんた一体何者！邪魔しようつてんなら相手になってやるわよ！」

コ「馬鹿！ヤマト！何挑発してんだよ！ポケモンは、諦めて撤退するぞ！」

ヤ「はあ！？あんた何言つてんのよ！相手は、一人よ！？二人で攻めれば倒せるでしょ！」

コ「お前忘れたのか！？ナンバ博士が言つてただる接触禁止のトレナーの話！」

ヤ「え、ええ、言つてたけどつてもしかしてあいつが・・・」

コ「ああ、長髪に目深にかぶった帽子そして極め付けに草タイプのポケモンそれも以前研究所を破壊してたトロピウス間違いない接

触禁止のトレーナー「エクスキューション人」だ！」

コサブロウがそう叫ぶと青年は、笑みを浮かべ、ヤマトとコサブロウの会話を聞いていたシゲル達は、青年の事をただ見ていた。

すると青年がシゲル達を見て微笑んだまるでもう何もかも終わっているかのように。

青年「トロピウス！奴らにソーラービーム！」

「クオークワァー！」

ドウオン！

ヤ・コ「やな気持ち〜！」

キラン

ロケット団の二人が星になった後トロピウスに乗っていた青年が地面に着地してトロピウスに「ありがとう」と言って撫でていた。

シロ「助けてくれてありがとう。」

青年「お礼なんていいですよシロナさん此処に来なくちゃいけないかったし」

シゲ「此処につてオーキド研究所に用ですか？」

青年「ああ、そうなんだ。」

オ「すまんが今パーティーを開いていてな少しの間仕事は、無なんじゃすまんのう」

ハナ「そうだは、あなたもパーティーに参加してくださいませんか？」

オ「おお！それは、言い考えじゃそうしてくれませんかそうしてくれれば仕事の話もできるしお礼もできる是非パーティーに参加してください」

つとオーキドが青年に問いかけると青年は必死に笑いをこらえていた。

青年「ククク、ハハハハハア！」

一同「「「「え？」「」「」」」

青年「ハァゝあ皆ホントに俺が分からないの？」

パーティー参加者全員が「え？」と疑問の声を発していた。

青年「俺だよ俺」

一同「「「「「な!?!?!」」」」」

青年がかぶっていた帽子と羽織っていたコートを取ると全員が仰天の声を挙げた。

何故ならそこに立っていたのは、自分たちのよく知る人物だった。

ハル「サ、サトシ?」

サ「皆、久しぶり!」

t o b e c o n t i n u e

## 第一話久しぶり！（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか？

楽しんでいただけたのならこちらも幸いです。

では、次回にご期待ください！

## 第二話ありがとう！（前書き）

この小説内でのサトシ達の年齢設定はカントー、ジヨウトで10歳、ホウエンで11歳、シンオウで12歳、イッシュで13歳。なので、本作では2年後の話なので15歳です。

## 第二話ありがとう！

サトシ「皆、久しぶり！」

そう言つてサトシは微笑む。

タケシ「本当に久しぶりだな！サトシ！見違えたぞ！」

シゲル「ほんとだよ。あのサトシ君がこんなに立派になるなんてな」

サトシ「皆には負けるよ。」

そのサトシの一言でシゲル達が凍りつく。

一同『え？』

シゲル（あ、あのサトシがけなされても怒らないだつて！？）

タケシ（ほんとにサトシだよな？）

全員、同じ事を心の中で思った。

サトシ「あつ、皆俺がけなされてるのに怒らないの見て驚いてるな」

一同（当たってる！？）

サトシ「まあいいや、母さん」

ハナコ「な、なに？」

ハナコはサトシの突然の呼びかけに少し戸惑ってしまった。

ガバツ！

一同『！？』

サトシは突然ハナコを抱きしめたその光景を見た一同が驚愕の色を隠せずにいた。

ハナコ「サ、サトシ、どうしたの？急に」

サトシはハナコから離れると何処からか花束を取りだした。

その花束には、赤いカーネーションと赤い薔薇、きしょうぶ、かきつばた、スターチス、ローズマリー、しろつめくさ、バーベナ等の花が合計100本ある。

ハナコ「サトシこれって一体・・・」

サトシ「母さん、俺を生んでくれて、“ありがとう”！」

ハナコ「！？」

ハナコは驚きと同時に思い出した今日が母の日だという事にそして、“あの人がこの日にくれた100本の薔薇の花束を・・・”

オーキド「サトシどうしたんじゃ？急に」



オーキドが皆を代表してサトシに聞いてみるとサトシは平然と「今日が母の日だから」だと答えた。

ハナコ「サトシ、」

ガバツ！

ハナコはサトシを抱き寄せて言った。

「“ありがとう”」

涙ぐみながら、何度も、何度も、何度も。

シンジ「感動してるとこ悪いが、お前に聞きたい事がある。」

サトシはハナコから離れるとシンジの言いたい事が分かっているかの様にシンジの前に立つ。

シンジ「さっきの二人組が言っていた“エクスキューション処刑人”とは一体何の事だちゃんと話してもらうからな」

シンジはそう言ってサトシを睨みつける。

サトシ「フツ、お前はすごいよな分かった話すよその前に、出てきたらどうだ！」

サトシがそう叫ぶと森から二人の人が歩いてきた。

？「さすがだなサトシ！」

？「・・・」

森から出て来たのは一人は女で一人は男のようだ。

サトシ「付いて来たのか、リュウキ、シズク。」

ハルカ「サトシ、あの人たち誰？」

サトシ「ん？ああ、あいつらは旅の途中で知り合った友達さ、右がシズクで左がリュウキだ」

シゲル「へえー、シズクさんにリュウキ君か」

シゲルがそう言うのとサトシとシズクが驚いたかをした後二人が笑い出した。

サトシ「クックククク、」

シズク「プツ、フフフ、」

一同『？』

全員が一体何が可笑しんだと言う表情を浮かべる中、リュウキがキレながらサトシ達に突っかって言った。

リュウキ「笑うんじゃないね！それと俺は“女”だ！」

そう言つてリュウキは後ろで結っていた髪留めを外した。

一同『ええ~~~~~~~~~~~~!!?』

t  
o  
  
b  
e  
  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
r  
d  
e

## 第二話ありがとう！（後書き）

オリキャラの設定

名前 リュウキ／性別 女／一人称 俺  
詳細

サトシがロイヤル地方を旅している途中で出会った。

最初は、女らしかったがサトシとの旅で激変した。

手持ち：ウィンディ、？？？、？？？、？？？、？？？、  
？？？

シズクは次回です。

### 第三話ソング&バトル(前書き)

前回のオリキャラの設定の修正版

名前 リュウキ/性別 女/一人称 俺

詳細

サトシがロイヤル地方で出会ったお嬢様。

家族に甘やかされるのが嫌で家出し、途方もなく歩いていたのをサトシに見えられ事情を話し「じゃあ一緒に旅しないか」と誘われ一緒に旅を شدした。

最初のころは自分の事を私と呼んでいたりお洒落な服装だったが野生のポケモンに襲われそうになった時、自分を庇って怪我をしたサトシを見て「か弱い女の子で居たくない」と言う思いを抱き旅をして行く内に服装が男物になり一人称が俺になった。

旅をして行く度に自分がサトシを好きなのを気づきサトシに告白したが見事に玉砕したが今でも好きな気持ちは変わらない。

旅の最初のパートナーは家で飼っていたガーディーである。

手持ち：ウィンディ・キュウコン・ブースター・リザードン・バクフーン・?????

### 第三話 ソング&バトル

一同『ええーーーーー!!!!!!』

リュウキ「うるせえ！」

リュウキの一括で全員が落ち着きを取り戻した。

タケシ「驚いたなあ、まさか“女の子”だったなんて」

ナナコ「ホンマやでうちも驚きすぎて顎外れそうになったわ」

ナナコはそう言いながら顎に手を当てていた。

その光景を見たサトシとシズクはさらに吹き出す笑いを必死に堪えていた。

リュウキ「テメエらも何時まで笑ってんだ！」

リュウキが叫んでいるのを無視してサトシとシズクは話をしていた。

リュウキ「テ・メ・エ・ら〜」

シンジ「取り込み中の所悪いが、教えてもらおうか処刑人<sup>エクスキューション</sup>とは一体何だ」

シンジのまじめな声に今までのおちゃらけた雰囲気が変わった。

サトシ「ああ、いいぜ俺がそう呼ばれてるのは奴らのアジトや研究

所を悉く破壊してるうちに組織内で絶対接触禁止と言う規制が出来て“最大の強敵”とされて罪人を裁いていると言う事からそう言う名前が付いたわけ。」

ヒロシ「奴らの言ってた新たな組織って一体何なんだ？」

サトシ「分からない、けど、また潰せばいいさ」

サトシのその笑顔に会場に居た女性全員が心打たれた。

カスミ（何なのよ！あの笑顔！／／／）

ハルカ（反則かも／／／）

ヒカリ（何？この気持ち、私もしかしてサトシの事／／／）

アイリス（あたしがあんなお子ちゃまにときめくなんて／／／）

リラ（やっぱり僕はサトシが／／／）

モエ（はあゝやっぱり諦められへん！／／／）

ナナコ（なんやろこの気持ちサトシはんをそんな目で見た事無かったけど見られずにはいられて！／／／）

アオイ（サトシの奴！あれは反則だろ！／／／）

ノゾミ（あたしとした事が笑顔だけでこんな気持ちになるなんて／／／）

女性一同『（サトシ（君、さん）恐ろしい人！）』

女性陣がそんな事を思っている時、ジュンがサトシにバトルを挑んだ模様でそのことで女性陣は現実に戻ってきた。

ジュン「使用ポケモンは一体良いな？」

サトシ「ああ！」

二人はうなずきベルトからモンスターボールを手に取った。

ジュン「行け！エンペルト！」

エンペルトの登場に皆はサトシのポケモンを推測しだした。

タケシ「今気づいたけどサトシ！ピカチュウは如何した？」

タケシの声にサトシは額から汗を大量に流しながら言った。

サトシ「やっべー！ピカチュウ置いて来ちゃった！」

その声に全員がズッコケた。

ピカチュウ「ピ・カ・ピ」

サトシのそばに黒いオーラを出しているピカチュウが笑顔で居た。

サトシ「ピ、ピカチュウ！？如何して！？」

シズク「私が連れて来た」



サトシの疑問にシズクが答えた。

サトシ「シズク！ ナイス！」

とサトシがシズクに満面の笑みをしながら親指を向けていた。

それを見たシズクは頬を赤らめた。

ピカチュウ「ピカピカ〜チュウ！」

サトシ「うわぁー！！！」

ピカチュウの電撃を受けてサトシが悲鳴を上げながらもがいていた。

サトシ「ピカチュウ・・・ごめん。」

ジュン「サトシ、ドンマイ。」

ジュンはサトシに合掌した。

サトシ「仕切りなおしてピカチュウが駄目だから行ってくれ！」

そう言ってサトシはボールを空高くほおり投げた。

光と共にフィールドに現れたのは・・・。

マサト「リーフィアだ！」

リーフィアは現れるなりサトシの肩に飛び乗りサトシの頬にキスし

た。

その光景を見たジャローダとメガニウムとエテボースと隠れてたラティアスが怒り狂っていた。

side ポケモン（言葉あり）

ジャローダ「何あの子！いきなりキ、キ、キ、キスするなんて！」

メガニウム「新入りのくせに生意気よ！」

エテボース「サトシもなんで赤くなってんのよ！」

ラティアス「サトシお兄ちゃんに気易く触れないでよ！」

ポケモン一同『コ、怖い！？』

side out

サトシ「リーフィア、や、やめろよ」

サトシは赤面しながらもまんざらでも無いようだった。

ジュン「先行は「ジュンからでいいよ」そ、そうかサンキュー！」

タケシ「それでは、始！」

ジュン「エンペルト！冷凍ビーム！」

サトシ「かわせ！そしてエナジーボール！」

冷凍ビームをかわしたリーフィアはエンペルトに向かってエネルギーボールを放った。

そのエネルギーボールは見事にエンペルトに直撃した。

ジュン「負けるな！ドリル嘴！」

サトシ「リーフブレード！」

ドリル嘴とリーフブレードが激突し爆風が起こった。

ジュン「クソ！何も見えねえー！」

サトシ「ジュンこの勝負俺の勝ちだ！」

突然の勝利宣言に全員は驚いた。

ジュン「じゃあやってみな！」

サトシ「リーフィア！ソーラービーム！発射！」

サトシのその指示を待っていたかのようにリーフィアがエンペルトにソーラービームを放った。

ジュン「エンペルト！？」

ジュンはエンペルトに駆け寄り「大丈夫か？」と声をかけた。

「クオオ・・・」

ジュン「そうか、ゆつくり休んでくれ」

サトシ「大丈夫かエンペルトは？」

サトシとリーフィアがエンペルトを心配して近づいて来た。

ジュン「ああ、サンキューな、それよりも何だってんだよお前のリーフィアは？」

サトシ「ピカチュウと一緒に旅をしてバトルして勝って負けてを繰り返したからな強いのは当たり前さ！」

そう言つてサトシはリーフィアとピカチュウを撫でてやる。

つと其処にシズクが近づいて来た。

シズク「サトシ」

サトシ「ん？何だシズク」

シズク「歌つて」

サトシ「ああ、いいぜ」

リュウキ「ん？おい！シズクずりいぞ！一人だけ！」

シズク「早い者勝ち」

サトシ「まあまあ二人とも、二人のリクエスト聞くから」

リュウキ「ま、まあ、サトシがそう言うんだったら・・・」

シズク「・・・」

二人の頬は真つ赤に染まっていた。

ジュン「なんだよ！サトシ！お前歌えんのか！？」

その声に参加者全員がサトシの方を見だした。

リュウキ「俺からもリクエストはp l a t i n u m   s m i l e だ  
！」

サトシ「分かった！」

そう言つてサトシは深呼吸して瞼を閉じて深呼吸し終えるのと同時に瞼を開いた。

サトシ「つゝなゝいゝだ手が はゝなゝれゝた時 きゝもゝちも途  
切れちゃいそゝおで

うゝしゝなゝう事の あゝしゝたゝにまゝだなゝれないみたい 知  
らないふゝりゝしゝた

にぎゝりしめた音の無いせかゝいで 音を立てて崩れゝおゝちてゝ  
いくゝ

わゝらゝわゝない空へ プラチゝナゝなゝスゝマイルで

誤魔化しゝては 傷つけたり 大人にゝなれなゝいまま  
遠ざかるゝ

わゝらゝわゝない空へ プラチゝナゝスゝマイルで

誤魔化しゝては 傷つけたり 大人にゝなれなゝいまま

だかゝらゝ

かゝざゝらゝない君がゝ とゝおゝまゝわゝりゝな優しさが

たまに見ゝせゝる照れわらゝいゝも

全部ぜゝんゝぶ ゆゝるゝせゝたゝ

思いでたゝちゝ  
ゝ

サトシが歌い終わった後リュウキとシズク以外の全員が開いた口が  
塞がらなかった。

一同『(すごくうまい!)』

t o b e c o n t i n r d e

### 第三話ソング&バトル（後書き）

オリキャラ設定

名前 シズク／性別 女／一人称 私

詳細

サトシがロイヤル地方で出会った少女。

不思議な力があるせいで友達もできず家族に見放され他人を信じなかったがサトシと出会った。

が、最初はサトシを敵視していたが高熱を出した自分のポケモンを介抱したり崖から落ちそうな時助けられたりなど分け隔てなく接するサトシを好きになり共に旅に出た。

一度告白したが答えはnoだった。

しかし、未だサトシを諦めきれずサトシを振り向かせるなどアプローチして気を惹こうとしている。

手持ち：シャワーズ、ミロカロス、ギャラドス、ダイケンキ、ラグラージ、????

シャワーズが最初のパートナー。

#### 第四話 ソング&バトル2 (前書き)

今回、サトシがちょっとキャラ崩壊するかもしれません。

サトシ好きの皆さん、本当にすみません。



## 第四話ソング&バトル2

サトシの歌に一同が驚愕の顔をしているのもお構い無にリュウキとシズクはサトシに次の曲のリクエストを出していた。

リュウキ「次何歌ってもらおっかな」

リュウキがリクエストを考えている時、シューティーがサトシに近ずいて行った。

サトシ「ん？如何した？シューティー」

シューティー「僕とバトルをしてくれないか？」

シューティーの発言にリュウキとシズクが止めると異論を述べたがサトシが許可し二人はバトルができる場所に移動した。

サトシ「使用ポケモンは？」

シューティー「6体のフルバトルだ」

サトシ「OK！タケシ！悪いけど審判頼むわ」

そう言われタケシが分かったと言って審判する位置についた。

タケシ「これより、マサラタウンのサトシとカノコタウンのシューティーによるフルバトルを開始します。」

シューティー「行け！ケンホロウ！」

シューティーはモンスターボールを投げボールから光と共にケンホロウが姿を現した。

サトシ「ロズレイド！君に決めた！」

サトシの出したポケモンにマサトはなんで飛行タイプに草タイプを出したのか？と疑問の声を挙げたがそばにいたハルカとヒカリが何か作があるはずと言った。

シューティー「飛行タイプに草タイプなんて本当に君は基本が成って無いな」

サトシ「ハハハ、それは如何かな？」

サトシの意味ありげな笑みにシューティーは眉間に皺を寄せた。

タケシ「それじゃあ、先行は「シューティーでいいよ」そうか分かった。それでは始！」

タケシの号令と共にシューティーはケンホロウに指示を出した。

シューティー「ケンホロウ！燕返し！」

サトシ「ロズレイド！守る！」

ケンホロウの燕返しをロズレイドは守るを使ってガードした。

シューティー「ケンホロウ！エアスラッシュ！」

サトシ「ロズレイド！かわしてメロメロ！」

シューティー「何！？」

ロズレイドはケンホロウの攻撃をかわしケンホロウに向かってウインクをした。

そのウインクを受けケンホロウがメロメロになってしまった。

ジャローダ「（私のポジションが！？）」

ジャローダの悲痛な叫びは人間達には聞こえなかった。

シューティー「クツ、ロズレイドもメロメロを覚えているのか」

サトシ「ロズレイド！ケンホロウに向かってソーラービーム！」

サトシの指示と共にロズレイドは光を吸収しソーラービームを放つ態勢に入った。

シューティー「まずい！ケンホロウ！空を飛ぶ！」

しかし、ケンホロウはロズレイドのメロメロで動けなかった。

サトシ「ソーラービーム！発射！」

「ロズレイド！」

ロズレイドの放ったソーラービームがケンホロウに見事命中しケンホロウは戦闘不能になった。

シューティー「戻れ、ケンホロウ。次はお前だ、行け！バイバナラ！」

シューティーの次のポケモンはアイスクリームのようなポケモンだがブリザードポケモンと呼ばれているバイバナラだ。

シューティー「バイバナラ！冷凍ビーム！」

サトシ「ロズレイド、影分身」

バイバナラの冷凍ビームがロズレイドに当たる直前にロズレイドが分身して攻撃は不発となった。

シューティー「なら、影全部に冷凍ビーム！」

冷凍ビームがロズレイドの影を1体1体消していくが全部の影に冷凍ビームを撃ったが本物のロズレイドはいなかった。

シューティー「一体どこに！？」

サトシ「ロズレイド！破壊光線！」

シューティー「何！？」

ロズレイドはいつの間にかバイバナラの上において至近距離で破壊光線を受けたバイバナラは大ダメージを受けた。

シューティー「クッ！バイバナラ！吹雪！」

バイバニラは体制を立て直しロズレイドに向かって吹雪を放った。

サトシ「ロズレイド！エナジーボール！連打！」

ロズレイドのエナジーボールがバイバニラの吹雪と相殺し爆発が起きた。

シューティー「クッ！何も見えない！」

サトシ「ロズレイド！リーフストーム！」

シューティー「！？」

リーフストームを受けバイバニラが戦闘不能になった。

シューティー「戻れ、バイバニラ。行け！ローブシン！」

サトシ「ロズレイド、戻ってくれ」

そう言われロズレイドはモンスターボールに戻った。

サトシ「ユキノオー！君に決めた！」

シューティー「ローブシン！ストーンエッジ！」

サトシ「ユキノオー！吹雪！」

ストーンエッジと吹雪がぶつかりあい又しても爆発が起きた。

サトシ「ユキノオー、絶対零度！」

シューティー「何!？」

ローブシンはユキノオーの絶対零度で早くも戦闘不能。

シューティー「クツ!行け!シャンドラ!」

サトシ「シューティー」

シューティー「何だい、バトルに専念したいんだが」

サトシ「楽しいか？」

シューティー「はあ？」

シューティーはサトシの言っている意味が分からなかった。

サトシ「いや、何でもない」

シューティー「変な奴だな君は。シャンドラ!火炎放射!」

サトシ「ユキノオー!かわして、地震!」

ユキノオーはシャンドラの攻撃をかわし大地に向かって地震を起こした。

地震をともに受けたシャンドラも大ダメージを受けた。

シューティー「シャンドラ!負けるな!火炎放射!」

シャンドラの攻撃はユキノオーに当たりユキノオーは火傷を負った。

シューティー「よし！シャンドラ！煉獄！」

サトシ「ユキノオー！」

シャンドラが放った攻撃でユキノオーは戦闘不能になった。

サトシ「ユキノオーゆっくり休んでくれ。ロズレイド！もう一度行ってくれ！」

シューティー「シャンドラ！煉獄だ！」

サトシ「ロズレイド！雨乞いからのウェザーボール！」

シューティー「何！？」

ロズレイドの雨乞いで煉獄の威力は落ちさらに水タイプの技になったウェザーボールがシャンドラに命中しシャンドラは戦闘不能になった。

シューティー「行け！ブルンゲル！冷凍ビーム！」

サトシ「守る！からエナジーボール！」

シューティー「かわして、冷凍ビーム！」

目の前で起きているハイレベルのバトルにハルカ達は驚愕の色を隠せずにいた。

ワタル「あれが、サトシ君、なのか」

シロナ「ええ、そう、みたい」

ジンダイ「少年はもう少年ではないと言うことが、」

チャンピオン二人とフロンティア・ブレーンはサトシの成長に驚きこれから先の事を考え始めた。

そうしてる間にシューティーのブルンゲルが戦闘不能になっていた。

シューティー「驚いたよ！ツシュリーグでは互角だったのにたった二年で此処まで離されるなんて」

サトシ「俺だって、何時までも子供のままではいられないんだよ」

サトシのその呟きは誰にも聞こえなかった。

シューティー「行け！ジャローダ！」

サトシ「戻れ、ロズレイド、ピカチュウ君に決めた！」

フィールドにジャローダとピカチュウが互いに睨みあい主人の指示を待っている。

シューティー「ジャローダ！グラスミキサー！」

サトシ「ピカチュウ！十万ボルト！」

グラスミキサーと十万ボルトがぶつかり合い互いに相殺した。



シューティー「リーフブレード！」

サトシ「アイアンテール！」

互いに指示を飛ばし熱戦となったサトシとシューティーのバトル

シューティー「これで終わりにする！ジャローダ！リーフストーム！」

サトシ「ああ！ピカチュウ！ボルツテカー！」

シューティー・サトシ「行っけー！」

「ピーカーチュー！！！」

「クオアー！！！」

ボウガン！！！！

激しい爆発と共に爆風が起きどちらが倒れていてもおかしくない状態だった。

煙が晴れ其処に居たのは……

倒れているジャローダと立っているピカチュウだった。

タケシ「ジャローダ！戦闘不能！ピカチュウの勝ち！よって勝者マサラタウンのサトシ！」

タケシの声と共に参加者全員が歓声を上げある者は勝者に抱きつき、またある者は密かに闘志を燃やし、またある者は顔を赤らめるなど人様々だった。

サトシ「シューティー、ありがとう、良いバトルだった」

そう言つてサトシはシューティーに右手を差し出した。

シューティー「不思議だ、負けたのにすごくスッキリしてる。此方こそ良いバトルをありがとう。なあ、」

サトシ「ん？」

シューティー「さつき、楽しいかつて聞いたよな」

サトシ「ああ、」

シューティー「僕の答えはこうだ、“ああ、すごく楽しい！”ってね」

そう言つて二人は握手を交わし絆を深めた。

サトシ「あつ、そうだ！シズク！歌歌う約束だったな」

シズク「二曲連続で、“くちづけ”と“・・・そう”」

シズクの選曲を聞いたサトシとリュウキは驚きサトシは照れリュウキはシズクに異論を唱えた。

リュウキ「おい！シズク！おまえ、ただ単に“あれ”やりたいただけ

だろ！」

シズク「羨ましいんだっ たら皆もやっ てもらえばいい」

その言葉にリュウキは耳まで真っ赤になり他の皆は頭に？を浮かべている。

そう言ってる間にサトシの歌う準備が整ったらしい。

サトシ「愛し、愛し合えると言っ の？君の唇を塞ぐよ

目を閉じて 罪深き くちづけ」

そう歌ってサトシはシズクを抱き寄せ自分の顔をシズクの顔に近づけ唇が触れそうなほどまで近ずきシズクの瞼を手で閉ざして自分の唇とシズクの唇を重ねた。

その光景を見た女性陣は赤面する者と悲鳴を上げるものが居た。

サトシ「お前の匂い 狂わせる

真夜中に目覚めて 狂気 愛 飲み干す」

そう歌ってサトシはシズクの髪にキスしシズクを後ろから抱き締めた。

サトシ「おいでこの腕の中 “あっ ちの闇は苦いよ”

君は惑い 揺らめく

やがて永遠になる“こっちの闇は甘いぞ”

僕は深く 突き刺す」

歌のとうりにサトシは腕を広げ微笑みながらシズクを誘う。

サトシ「おいでこの腕の中“あっちの闇は苦いよ”

君は少し 微笑む

これで永遠になる“こっちの闇は甘いぞ”

僕は深く 突き刺す」

そう歌い終わると同時にサトシはシズクから距離を取り赤面していた。

その顔を見てシズクは微笑んだ。

一同『今のは何だ!!??』

to be continue

### 第五話 ソング&バトル3

カスミ「サ、サ、サトシ！／／／」

サトシ「ん？」

サトシの下にカスミ、ハルカ、ヒカリ、アイリスの四人が顔を真っ赤にして近ずいて来た。

カスミ「あ、あんた、一体何考えてんのよ！人前であんな事するなんて！／／／」

サトシ「俺だって恥ずかしいよ人前であんな事するなんて」

ハルカ「じゃ、じゃあ何で人前でキ、キスしたの？／／／」

サトシ「キスって言うてもあっちじゃ挨拶みたいなもんだからな」

ヒカリ「で、でも此処は外国じゃないんだよ人前でそのキ、キスとかしたら皆びつくりするよ」

サトシ「ごめんごめん、でも、シズク達はただの大切な仲間じゃないからかな」

アイリス「え、ただの仲間じゃないって如何言う意味よ」

サトシ「さあゝなんだろうな」

そう言ってサトシは再び歌う準備に入った。

そして、音楽が流れ始めた。

サトシ「その旅の経験だけで 全てを量ろうなんて そんなのはお門違い笑わさないでよね

だけど偶には 楽しいバトル 必要だと思うの

気が済むまで 僕だって 満足したいよ

ああ、目の前から“消えて行った”屈強な“あの人たち”

じりじりって燃えるような この感じが“たまらない”

ねえ、激しいバトルがいいなら 僕をねもつと本気にさせて

逃げるなんて 許さないよ やっぱり 君は その程度なんだ」

其処まで歌って少しの間が空きサトシはリズムに乗っている。

サトシ「強いのもいいと思うけれど 可愛いのも嫌いじゃない

そんな 僕の事を“伝説”だと言うの

無口だとか 幽霊とか 言わせて置けばいいわ

人の価値観なんて 僕には意味がない

ああ、掌から 溶けて行った この氷の粒みたいに

パラパラって 落ちるような この冷たさ “ たまらない ”

さあ、バトルの結末見せてよ 君と僕とどっちが勝つの？

十六個の実力見せてよ ホントに君は “ 強いんだろ？ ”

また少し間ができサトシはシズクやリュウキに目をやったりしていた。

サトシ “ 楽しい ” とか “ 勝ちたい ” とか

それはただの 自己満足

そう言うのを全部捨てて 本気でいい 思わせて

もう必中吹雪で良いでしょ 一体どこに不満があるの？

君の相棒を氷漬け だからね ほらね 覚悟して

ダイヤモンドダストでも良いから そのバトル最後まで続けて

何処まで行っても 止まらない だけどね でもね そろそろ限界

そう歌って歌は終わったするとシンジがサトシに近ずいて行った。

それを見た人達は “ バトルを挑む気だ！ ” と心の中で思った。

シンジ “ おい ”

サトシ “ 分かってるよ、バトルだろ？ ”

シンジ「ああ、使用ポケモンは三体」

そう言つてサトシとシンジはバトルフィールドの位置についた。

サトシ「ドレディア！君に決めた！」

サトシが出したのは女性の姿をした花の飾りを基調としたポケモンのドレディアだった。

シンジ「ドラピオン！バトルスタンバイ！」

対するシンジが出したのは蠍のようなポケモン、ドラピオンを出した。

タケシ「始！」

又しても審判をやらせれてるタケシの合図でバトルが始まった。

専攻はシンジだった。

シンジ「ドラピオン！シザークロス！」

サトシ「かわして、眠り粉！」

ドレディアは攻撃をかわしドラピオンに青白い粉を振りまいた。

シンジ「穴を掘るでかわせ！」

サトシ「根を張るで捕まえろ！」



眠り粉をかわし地面に潜ったドラピオンだがドレディアの根を張るで地上に引きずれ出された。

シンジ「炎の牙で根を噛み切れ！」

ドラピオンの炎の牙で根は全焼し見事脱出に成功した。

サトシ「ドレディア！エナジーボール！」

シンジ「ドラピオン！シャドーボール！」

二人はほぼ同時に指示を出しドレディアとドラピオンの放ったエナジーボールとシャドーボールが激怒とつし、激しい爆風が起きた。

アオイ「サトシ！負けんじゃねえぞ！」

ジュン「何だってんだよ！明らかな俺の時より盛り上がってんじゃねえか！」

ナオシ「これは、私もバトルしたくなりましたね」

観覧席ではアオイがサトシを応援しジュンが嘆きナオシが密かに闘志を燃やしていた。

爆風と煙が止み視界が戻ったことで再び二人の指示が始まった。

サトシ「ドレディア！甘い香り！」

シンジ「ドラピオン！破壊光線！」

ドレディアの甘い香りをかき消したドラピオンの破壊光線はそのま  
まドレディアに向かって行った。

サトシ「ドレディア！守る！」

シンジ「手を休めるな！クロスポイズン！」

ドレディアに破壊光線を防がれシンジはドラピオンに攻撃の指示を  
出した。

サトシ「今だ！ドレディア！メロメロ！」

シンジ「何！？」

ドレディアのメロメロが命中しドラピオンがメロメロ状態になった。

サトシ「ドレディア！破壊光線！」

シンジ「ドラピオン！かわせ！」

しかし、ドラピオンはメロメロでかわせなく破壊光線が命中し戦闘  
不能になった。

ジャローダ（また私のポジションが！？）

ジャローダは又しても自分のポジションが取られ悲観していた。

シンジ「戻れ、よくやった、次はお前だ！ブーバーン！バトルスタ  
ンバイ！」

シンジの次なるポケモンは草タイプの天敵、炎タイプのブーバーンだ。

シンジ「ブーバーン！火炎放射！」

火炎放射が命中しドレディアが戦闘不能になった。

サトシ「ゆっくり休んでくれ、やっぱり強いなシンジは」

シンジ「お前もな」

そう言つて二人は笑みを交わした。

サトシ「キノガッサ！君に決めた！」

サトシの二番手は草・格闘のキノガッサだった。

シンジ「ブーバーン！サイコキネシス！」

サトシ「かわして、気合い玉！」

シンジ「火炎放射！」

又しても爆発と爆雲が起き視界がおちた。

シンジ「何処に居る」

シンジが相手のポケモンの位置を把握しようとして辺りを見回していた。

その時、

サトシ「キノガッサ！ストーンエッジ！」

シンジ「！？」

ブーバーンにストーンエッジが命中した。

シンジ「心の目が、」

サトシ「当たりだ」

心の目は必ず相手に技が命中する技である。

シンジ「だが、俺も負けはしない！ブーバーン！大文字！」

サトシ「キノガッサ！破壊光線！」

破壊光線と大文字が激突し二体を爆風と衝撃が襲い二体は戦闘不能になった。

サトシ「戻れキノガッサ、よくやったゆつくり休んでくれ」

シンジ「戻れ、お前も努力無駄にはしない」

そう言うて二人は最後のポケモンの用意をした。

ヒカリ「これでサトシとシンジは次が最後のポケモン」

ノゾミ「でも、すごいね、サトシってさ」

ケンゴ「何がだよ？」

ノゾミ「だって、シンオウリーグでは最初まったくシンジのポケモンにダメージを与えられなかったサトシが今じゃシンジの最初のポケモンを倒したし二体目も先制でダメージを与えたのはサトシなんだよ。おまけに、サトシのポケモンは二体とも相手に有利なタイプだったでしょ」

ヒカリ「そう言えば、サトシが使ってたポケモンって、」

ケンゴ「全部草タイプのポケモン！」

ヒカリとケンゴの言葉に頷くノゾミ。

ノゾミ「そう、最初のドレディアの相手が毒タイプのドラピオン、二体目が炎タイプのブーバーン、どちらも草タイプが苦手とするタイプだよ」

ケンゴ「最悪の相性で互角に戦うってすごい」

ヒカリ「あつ！二人がポケモン出すみたいだよ！」

ヒカリの声に二人はまたバトルフィールドに目を向けた。

シンジ「お前、強くなったな、あの時より」

サトシ「いや、俺が強いんじゃないかってポケモン達が強いだよ」

シンジ「それもそうだな、これで、最後だ！ユキメノコ！バトルス

タンバイ！」

サトシ「ああ！望む所だ！ユレイドル！君に決めた！」

シンジはユキメノコ、サトシはユレイドルと最後にふさわしいポケモンが現れた。

しかし、一部だけはバトルより。

ヒョウタ「父さん！見てくださいあのユレイドル！」

トウガン「ああ！見ているぞ！ヒョウタ！なんと美しく巨大なユレイドルだ！」

ヒョウタ「すごい！後でサトシ君に見せてもらおう！」

トウガン「まで！先に見るのはわしだ！」

ヒョウタ「何言ってるんですか！僕が先です！」

トウガン「わしだ！」

ヒョウタ「僕です！」

トウガン「わ・し・だ！」

ヒョウタ「ぼ・く・で・す！」

その光景を見ていた面々はドン引きしていた明らかに。

ハルカ「でも、サトシの手持ちって」

カスミ「リーフィアにユキノオー、トロピウス、ロズレイド、」

マサト「ドレディア、キノガッサ、ユレイドル？」

アイリス「一匹多いじゃない！」

サトシがポケモンを7匹持っていると言っている四人の下にリュウキとシズクが近ずいて行った。

リュウキ「ちげえーよ、始める前にサトシからユキノオーを預かったんだ」

マサト「そうなんですか？」

マサトの返答に縦に頷くリュウキ。

シズク「でも、久しぶりに、サトシのユレイドル見た」

リュウキ「ああ、あいつ滅多に出さなかったからな」

シズク「それだけ、あのトレーナーが強いつてこと」

リュウキ「ああ、そうだな。もしかしたら、負けるかもなサトシ」

シズク「負けない、サトシは負けない」

シズクの言葉に辺りが静まり返った。

その静寂を破ったのはサトシの言葉だった。

サトシ「大丈夫だシズク、俺は負けない、絶対勝って見せる！」

そう言つてサトシは満面の笑みをシズクに向けた。

それを見たシズク達は顔を真っ赤にしてサトシから顔をそらした。

シンジ「罪作りの奴だなお前は」

サトシ「ハハッよく言われる」

そう言つて二人は笑いあつた

サトシ「それじゃあ」

シンジ「ああ」

サトシ「ユレイドル！エナジーボール！」

シンジ「ユキメノコ！シャドーボール！」

再び激しいバトルが始まった。

サトシ「ユレイドル！ヘドロウェーブ！」

シンジ「クツ！かわして冷凍ビーム！」

サトシ「なら、岩砕き！」



ユレイドルの岩砕きがユキメノコに当たり大ダメージを与えた。

シンジ「負けるな！吹雪！」

ユキメノコはすぐ体制を立て直しユレイドルに吹雪を放った。

吹雪は見事命中した。

サトシ「がんばれ！ユレイドル！地震だ！」

ユレイドルの起こした地震でユキメノコに再び大ダメージを与えた。

シンジ「こっちも負けるな！もう一度吹雪！」

二人のバトルは激しさを増しまさにさっきのシューティーとのバトルより熱戦となった。

シンジ「（ユキメノコはもう限界だ次で決める！）」

サトシ「（このまま長期戦になれば確実に負ける次で決めるしかない！）」

ユレイドルとユキメノコは共に息を切らしぼろぼろの状態で距離を取っていた。

サトシ「ユレイドル・・・」

シンジ「ユキメノコ・・・」

一瞬の静寂、そして二人が同時に動いた。

シンジ「シャドーボール!!!」

サトシ「ストーンエッジ!!!」

二人の指示で二体のポケモンは同時に技を出した。

ドゴーン!!!

激しい爆発と共に爆雲が起きた。

爆雲が晴れそこで目にしたのは……!

倒れたユキメノコと

立っているユレイドルだった。

タケシ「ユキメノコ戦闘不能!ユレイドルの勝ち!よって勝者マサラタウンのサトシ!」

シンジ「ユキメノコ、よく頑張ったゆっくり休んでくれ」

サトシ「ユレイドルサンキューなゆっくり休んでくれ」

シンジ「良いバトルだった」

サトシ「ああ、此方こそ」

そう言って二人は厚く握手を交わした。

t  
o  
  
b  
e  
  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
r  
d  
e

## 第五話 ソング&バトル3 (後書き)

今回、使用した曲は、初音ミクの「え? ああ、そう」のアレンジで「・・・そう」です。

ありがとうございます。

## 第六話会いたい人と会いたくない人（前書き）

ちょっと、サトシと意外な人達とのカップリングを作ってみました。

## 第六話会いたい人と会いたくない人

シンジとのバトルが終わり、サトシは一人森の中に居た。

サトシ「そんな所に居ないでこっちに来なよ」

サトシは森の闇に向かって話しかけた。

？「君はやっぱり凄いな、私の存在に気づくなんて」

暗闇から姿を現したのは黒髪にウェーブがかかった女性だった。

サトシ「髪、切ったんだ“ナツメ”。」

サトシの目の前にいる女性の正体はカントー地方、ヤマブキシティのジムリーダー「ナツメ」だった。

ナツメ「ああ、ちょっとした気分転換さ。それより、ロイヤルリーグ優勝おめでとう。」

そう言つてナツメは超能力で何処からか花束を取り出した。

サトシ「ありがとうでも、薔薇って、」

ナツメ「嫌だったか？」

サトシ「いや、嫌じゃないけど、花の意味が、」

ナツメ「花の意味？」

ナツメは首をかしげてサトシに聞いた。

サトシ「薔薇の花言葉は、情熱の愛なんだ」

サトシがそう告げるとナツメは

ナツメ「！？／／／／／」

顔を真っ赤にして体をくねらせている。

サトシ「まあ、知らなかったから仕方ないよ、あんまり気にすんな」

ナツメ「無理を言うな！間違っても今私は異性に愛を告げただぞ！それで気にするなと言う方がどうかしている」

ナツメのその言葉にサトシが溜息を吐きナツメに近づく。

サトシ「自分で選んだのか？」

ナツメ「いや、父と母に選んでもらった」

サトシ「（ナツメ父、ナツメ母、俺にナツメの夫になれと言うのか！？）」

サトシは心の中でそう叫んだ。

そして三度溜息を吐いた。

サトシ「でも、ちょっと嬉しかったかな」

ナツメ「え？」

サトシの言っている意味が分からずナツメが疑問の声をあげた。

サトシ「いや、間違いでも異性からの告白は嬉しかったって意味さ」

そう言ってサトシはナツメに向かって微笑んだ。

それを見たナツメはまた顔を真っ赤にして今にも倒れそうになった。

ナツメ「（クツ！何だこの気持ちは！まさか私は、サトシに恋したと言うのか！？まてまて！私はもう21で相手は15だぞ！？いくらなんでも年が離れすぎだぞ！しかし、父の友人に12歳も年が離れた夫婦がいるそれに比べれば7歳ぐらいどうってことないか）」

ナツメは心の中で自分がサトシの事を好きである事を自覚した。

ナツメ「あつ！そうだ」

サトシ「ん？」

ナツメ「まだあの時のお礼がまだだった」

サトシ「あの時？」

ナツメが言うあの時とはサトシがまだカントーを旅していた時、人の心を忘れていたナツメはサトシが連れて来たゴーストにより笑顔と人の心を取り戻すことができたのであった。



ナツメ「あの時は本当にありがとう」

そう言つてナツメはサトシに頭を下げてお礼を言った。

サトシ「いや、俺のおかげじゃないよ、あつ！あのゴーストは今元気が？」

その声を待っていましたかのようにナツメの後ろから何かが飛び出した。

「ゲーン」

その正体はゴーストの進化系のゲンガーだった。

サトシ「あのゴーストが進化したんだ！」

ナツメ「ああ、その子にはジム戦でも活躍してもらってるよ」

サトシ「そっか、」

そして暫しの沈黙。

ナツメ「今度、私の家に来てくれないか」

サトシ「ああ、いいぜ」

そう言つて二人は微笑みあった。

ナツメ「！むこうでもうすぐちょっとしたトラブルが起きるぞ」

サトシ「そうか、ありがとっ、お前もこっちに来ないか」

サトシのその誘いにナツメはまた顔を赤らめた。

ナツメ「ああ、／＼。でも、もう少しだけ此処に居させてくれ、そしたら、すぐに行く」

サトシ「そうか、わかった。じゃあまた後でな」

サトシはそう言ってナツメに一時的の別れを告げた。

s i d e   o u t

s i d e   i n   p a r t y

シズク「・・・」

シズクはただ空を鋭い目つきで睨んでいた。

そこに、

リュウキ「シズク、何見てんだよ？」

リュウキが近ずいて来た。

シズク「・・・」

シズクは何も答えなかった。

リュウキ「おい、何か言えよ」

そう言つてリュウキは腕を組んでシズクを睨んだ。

シズク「・・・来る」

リュウキ「え？」

シズクの呟きにリュウキは疑問の声をあげた。

其処にサトシが戻ってきた。

サトシ「どうしたんだ？二人共？」

サトシは空を見上げてるシズクとそのシズクを睨んでいるリュウキの姿を目にし困惑のした。

すると、突然空からボーマンダが現れサトシに向かって行つた。

サトシ「クッ！」

サトシはギリギリの所でかわしボーマンダを睨んだ。

が、そのボーマンダの背には、サトシがちょっと会いたくない人物の姿があつた。

ヒカリ「あなたは！？」

タケシ「ポケモンハンター“J”！？」

そつ、其処に居たのはシンオウ地方でサトシ達が出会つたポケモン

を無理やり捕まえ、コレクターや大富豪に金と交換で売り渡す違法な仕事をしていた本名不明の」と名乗る女だった。

シロナ「ポケモンハンターが一体何の御用かしら？」

シロナの質問に」は見向きもしないでサトシに話しかけた。

」「少年よ！私は貴様をいただきに来た！」

」のその発言に全員が驚愕した。

しかし、シズクとリュウキは無言でモンスターボールに手をかけ当の本人はまたか言わんばかりに大きな溜息を吐いた。

カスミ「サトシをいただくって如何言う意味よ！」

」「貴様には関係の無い事だ」

そう言つて」はサトシに向かって捕獲用のレーザー銃を放った。

つと、その瞬間、

「エーフィー！サイケコウセン！」

「アリアドス！ナイトヘッド！」

」「クツ！？」

何処からかの突然の攻撃に」は一瞬怯んだがすぐに体制を立て直した。

？「その子を奪うのは」

？「私達よ！」

そう言つて森から二人の女性が姿を現した。

カスミ「あ、あんた達は！？」

其処に居たのは・・・

カノン「ザンナー！」

ボンゴレ「リオン！」

水の都アルトマーレを壊滅させようとした張本人、怪盗、ザンナーとリオンであつた。

t o b e c o n t i n r d e

## 第七話サトシとJの出来事

突然現れた二人組の女怪盗、ザンナーとリオンをJを含む全員（サトシとシズクとリュウキを覗く）が鋭い目つきで二人を睨んでいる。

J「貴様ら、私の邪魔をするというのか？」

そう言つてJはもう一度二人を睨みつけた。

ザンナー「そんなに睨んでもだゝめ」

リオン「その子は私達が戴くわ」

Jとザンナー、リオンの三人は再びポケモンに指示し、激しい戦いが始まった。

「ちゃんと、見とかなないと駄目だつて言つたでしょ？」

突如、聞こえた声に全員は声の主を探しJ達も戦いをやめ、声の主を探していた。

しかし、突然何かがサトシをロープで縛りあげモンスターボールからドンカラスを出し空に逃げようとした時、

J「ボーマンダ！破壊光線！」

ザンナー「エーフィー！サイケコウセン！」

リオン「アリアドス！ナイトヘッド！」

「達はポケモンに指示を出し逃げようとしている何者かに向かって攻撃を命じた。

その攻撃をかわした何者かは地上に着地し苦痛の表情を浮かべながら「達三人を睨みつけた。

？「クツ！邪魔をして！」

ヒカリ「！？貴方は！？」

ヒカリは地上から「達を睨んでいる人物を見て驚いた。

其処に居たには・・・

タケシ「マーズ！」

そう、其処に居たのは、嘗てシンオウ地方で暗躍していた“ギンガ団”の幹部の一人マーズであった。

ヒカリ「貴方が何でカントーに！」

マーズ「そんな決まってるわその子を奪うためよ」

マーズの言葉にカスミ達が反論した。

カスミ「何であんた達はサトシを狙うのよ！」

ハルカ「そうよそうよ！」

カノン「サトシ君に復讐するんだっ たらそうはさせないわよ!」

カスミ達の言葉に三人は少し顔を赤らめ言った。

「フン! 私達の目的は復讐では無い!」

ザンナー「そうなのよねえ」

リオン「あんな事されたらねえ」

マーズ「///」

「///」

リオンの言葉に」とマーズの二人は顔を真っ赤にさせ今にも倒れそうになった。

サトシ「ちょっと待て! 誤解を招くような事言っな!」

サトシの叫びも虚しく後ろから悪鬼がサトシの肩を叩いた。

カスミ「サトシ、あの事って何よ!」

カノン「サトシ君、最低」

カノンの最低が効いたのかサトシは其処に座り込んでしまった。

そんなサトシをリラとアオイが必死に慰めていた。

サトシ「まっ、久しぶりにお前らに会えてよかったよ」



そう言つてサトシは」達に微笑んだ。

それを見た」達は顔を真つ赤にさせながら、

」「ま、まあ、今回はこれ位にしておいてやる！／／／」

ザンナー「そ、そうね／／／」

リオン「じゃあ、また来るから覚悟しといてよ！／／／」

マーズ「／／／／／／」

そう言つて三人は闇の夜に消えて行つた。

しかし、サトシに降りかかった災難はまだ去っていないかった。

ヒカリ「サトシ説明して！」

カスミ「そうよ！説明しなさい！」

カノン「サトシ君、“あんな事”って何？」

ヒカリ・カスミ・カノン「」「何でサトシがあの子と仲よくしてんのよ！」「」

サトシ「一斉に喋るな！聞き取れない！」

サトシの叫びで我に返つた三人は「ごめん・・・」と恥ずかしげにサトシに謝罪した。

その後、サトシは「達について説明しようとしたがサトシはなんて言えがいいのか分からないでいた。

そんな時どこからか声が聞こえた。

「私が説明しよう」

その声に全員が振り向くと其処に居たのは・・・

サトシ「ナツメ！」

ヤマブキシティのジムリーダー“ナツメ”だった。

ヒカリ「タケシ、あの人だれ？」

タケシ「あの人はヤマブキシティのジムリーダーナツメさんだよ」

コトネ「でも何でサトシの事をナツメさんが説明するの？」

コトネの疑問にナツメが素早く回答した。

ナツメ「私には超能力があつてそれでサトシの事を知ったんだ。しかし、この力は何時の光景が何時見られるのか私にも分からない」

コトネ「ふん」

シロナ「で、貴方がサトシ君の事を説明してくれるのよね？」

シロナの問いにナツメは首を縦に振った。

ナツメ「奴らがサトシを狙っているのは復讐ではなく、惚れているからサトシを狙っているのだ」

ナツメの言葉に又してもカスミ達はサトシを睨んだ。

ナツメ「J」の場合は、ロイヤル地方を旅していたサトシはシンオウ地方から警察の手を掻い潜ってロイヤル地方に潜伏していたJに見つかりピカチュウと自分の命までも狙われたがポケモンバトルでサトシに完敗し、また何処かに隠れたが、其処に凶暴化したペンドラーとボスゴドラが現れJに攻撃しJは大怪我を負い絶体絶命のピンチをサトシに救われたんだ。サトシはジュンサーにも言わず密かにJを介抱しJの命を救ったんだ。」

タケシ「へえ、すごいじゃないか！サトシ！でも、何も言われなかったか？」

タケシの疑問はもつともだった以前のJなら敵に命を救われたとなると自決を謀るかもしれないし、軽くても暴れるぐらいはしたはずとサトシに聞くとサトシは頬を釣り上げ不敵な笑みを浮かべた。

サトシ「大丈夫だよ、常にピカチュウが電気で脅してたから平気だったよ。でも、何で自分を殺そうとした相手を助けるのかって言われたな」

サトシの口から脅しという言葉が現れ全員はサトシに恐怖を感じた。その恐怖のせいでその後サトシがなんて言ったか聞き取れていなかった。

ヒカリ「でも、其れ位じゃあ」は戒心しないと思うけど」

ヒカリの疑問はナツメが素早く回答した。

ナツメ「それはサトシが言った言葉が切っ掛けだと思う」

カスミ「切っ掛け？」

ハルカ「サトシなんて言ったの？」

ハルカの言葉にカスミ達がサトシに注目し始めた。

当のサトシは頬を掻きながら言った言葉を思い出していた。

サトシ「敵だろうが味方だろうが目の前で傷ついている奴を放って置けないし、お前だって初めてポケモンを貰って初めてポケモンバトルして初めてバトルで勝って嬉しかった筈だ。世間じゃお前を犯罪者って思ってるけど俺はただ道を踏み外したんだ思ってる。だから、お前が犯した罪をその身に背負って生きていけそれがお前に出来る罪の償いだ。今のお前は人生の道で少し寄り道したただけなんだ。だから、此処からまた歩いて行けば良いんだってな」

サトシの言葉を聞いた全員がまるで天使に会ったような感覚に襲われた。

一同『（サトシ（君）（さん）成長しすぎだ！』

t o b e c o n t i n r d e

## 第八話サトシとザンナーとリオンと序にマーズの出来事（前書き）

もう、滅茶苦茶です。>|<。

## 第八話サトシとザンナーとリオンと序にマーズの出来事

ナツメ「まあ、サトシの名言は一先ず置いて、皆お待ちかね、ザンナーとリオンの出来事だ」

サトシ「いや、其処まで待つて無いと思うぞ」

サトシはナツメのボケに的確な突っ込みを入れた。

サトシに突っ込まれたナツメは顔を真っ赤にした後、咳払いをしてから話しの本題に入った。

ナツメ「あの二人がサトシに惚れたのは、」と同じく、ロイヤル地方での出来事が原因だ」

一同は、ただナツメの話しを黙って聞いていた。

ナツメ「二人は、新たな宝を求めてロイヤル地方に足を伸ばし、其処でサトシと再会してしまった。が、再会と言っても二人がサトシを見つけただけでサトシは二人の姿を目視してなかったんだ。其処で二人は、サトシに復讐を兼ねて畏とサトシの大切なものを奪おうと考えた訳、しかし、作戦を決行中に事故が起きて二人は崖下に真っ逆様に落ちて行った。」

カスミ「え！？落ちたの?!」

ヒカリ「それで、どうなったの?!」

カノン「早く教えて!」

そう言つてカスミに続いて意見を述べて来た。

ナツメ「まあまあ、そお急かすな、二人は崖下に落ちたが、不思議と痛みが何時まで経つても無いのでゆっくりと目を開けると、二人は自分達が宙に浮いている事に気が付いた。

何故、二人が宙に浮いているかという其れは、サトシのポケモンの“サイコネシス”で二人は宙に浮いていたんだ。

サイコネシスを解き、二人を地面に降ろすとサトシはそのまま旅の続きをしようと歩き出した時、ザンナーがサトシに言つたんだ。

「何故、敵である私を助けた！ 私たちはアルトマーレを破壊しようとしたんだぞ！？」と。

サトシは「と同じ言葉を言つたザンナーを見て呆れたんだ」

ナツメの「呆れた」という言葉を聞いたハルカがサトシに意味を聞いた。

サトシ「え？ ああ、なんて言つたけ？」

ズテーー！！

サトシの忘れた発言でカスミ達はズッコケタ。

其れを見たナツメは、溜息を吐き、サトシの代わりに言つた。

ナツメ「何時だったか同じ言葉を聞いたことがある。

でも、答えはいつも一緒だ。

敵だろうが味方だろうが、目の前で誰かが死ぬのはいやなんだ。だから助ける。

そう思えるのは、俺がその人たちを“大切”に思つてるからだと思

うからかな？。

そうサトシが言ったんだ。」

コトネ「へえ、サトシって偶に良い事言っじゃない！」

サトシ「偶には余計だ！」

コトネの発言をサトシが突っ込んでいるとヒカリがサトシに「じゃあ、マーズは？」と聞いて来た。

ナツメが答えようとした時。

サトシ「俺が言うよ」

ナツメ「！？」

ナツメは正直驚いた。

サトシは確かに鈍感ではなくなった（多少は）しかし、マーズとの出来事はサトシにとって大きな影響を与えた。

そして何より、サトシは一番マーズを“苦手”としているからサトシ自らマーズとの出来事を語ろうとするのはナツメにとって何よりも驚きであった。

サトシ「俺とマーズがまた出会ったのは言わずとも分かるロイヤル地方だ」

この件を何回聞いたか？と全員が心の中で呟いた。



サトシ「最初は、あいつがいきなり勝負を仕掛けてきて戸惑いながらもバトルしたけど、バトル中にマーズが俺に何か言ってたんだ。最初はまた「小癪な」とか「生意気な」とか言ってるんだと思ったら、全然違ったんだ」

ヒカリ「じゃあ、なんて言ってたの？」

ヒカリがサトシにそう聞くと、サトシは一瞬、悲しそうな表情を浮かべたのをヒカリ達は見逃さなかった。

サトシ「お前のせいで、お前のせいでアカギ様は消えた。

私の前からアカギ様は居なくなってしまった。

お前は、私からアカギ様を奪ったんだってさ」

サトシの話を黙って聞いていたカスミ達が次々と異論の声を上げ始めた。

カスミ「何よそれ！ただの逆恨みじゃない！」

ハルカ「そうよ！そうよ！それでサトシが恨まれるなんてお門違いかも！」

ヒカリ「其れに！アカギさんは自分からあの世界に行って消えたんだから、別にサトシが奪った訳じゃないじゃない！」

アイリス「サトシは何も悪くないじゃない！神のポケモンの争いを止めたんだから、寧ろ評価されるべきじゃない！」

サトシを、仲間を思ったカスミ達の言葉にサトシは笑いながら言った。

サトシ「みんな、ありがとう！」

又しても出たサトシの笑顔に再び赤面するカスミ達。

カスミ（だから！あの顔は反則！／／／）

ハルカ（何で、サトシの笑顔を見ると胸がドキドキするんだろ／／）

ヒカリ（今ので確信した！私はサトシの事が！／／／）

アイリス（ああ〜〜〜〜！又してもお子ちゃま相手にときめいてしまった！／／／）

リラ（ハア、これで本人に自覚が有れば／／／）

モエ（カスミ達もなんか顔が赤いつちゆう事は皆サトシはんの事が！？／／／）

ナナコ（ああもう！あんな顔されたら嫌でもそう言う目で見てしまうがな！／／／）

アオイ（また！サトシの奴！でも、其処に惚れたんだよな“あたし”／／／）

ノゾミ（一度ならず二度までも、あたし、どうしたんだろ？／／／）

カノン（うう、私、サトシ君に最低って言ったのにああやって普通に接してくれるなんて、私、サトシ君がどんどん好きになってっち

やうな／＼／

再び女性陣がトリップし、それぞれが変な妄想に浸っていた。

其れを見た男性陣が溜息交じりにサトシを見た。

等の本人は再び話をする体制に戻っていた。

其れを見た女性陣は妄想世界から戻り、サトシの話を聞く態勢に入った。

サトシ「そんな、マーズの姿を見たら、なんか、同情かもしれないけど、俺も、悲しくなって、申し訳なくって、そんな気持ちになったんだ。

それで俺、マーズに謝ったんだ」

ヒカリ「え・・・」

ヒカリは分からなかった。

ポケモンを使って世界を壊そうとしたアカギの部下に、何でサトシが頭を下げる必要があるのか、分からなかった。

ヒカリ「でも、マーズは何度も犯罪を犯してるんだよ？そんな奴にサトシが謝るなんておかしいよ！」

ハルカ「ヒカリ・・・」

ヒカリの叫び声が研究所に響き渡った。

そんなヒカリを見たハルカ達は、ヒカリにどんな言葉をかければいいのか分からないでいた。

サトシ「でもなヒカリ、マーズにとってアカギは、父の様な存在であり、片思いの人でもあるんだ。

そんな人が、急に居なくなったら俺なら、ぶっ壊れてるな。そう、ロイヤル地方で出会った時の、マーズの様に・・・」

そう言ってサトシは少し目を細め、ロイヤル地方でのマーズとのバトルを思い出していた。

サトシ「だから、俺は謝ったんだ。どんな理由があっても、俺があの時戦ったのは、ギンガ団でも復讐者でも無い、マーズと名乗った女性だ。」

その言葉に続く様にナツメがサトシの隣に行き話しの後を続けた。

ナツメ「お前が今俺に思ってる思い全てを俺にぶつける。俺もお前の思いをすべてを受け止めてやる。そしてお前の因果を断ち切ってやる。そう言ったのだ、サトシが」

ナツメは其れだけ言ってさっきいた場所まで戻って行った。

ヒカリ（そっか、サトシはそう考えたんだ。それじゃあ、追いつけない筈だ。

私は、善か悪を見定める前にその人の心の闇を受け止める事を学ばなきゃいけないみたいだね。

テレビでの仕事ばかりでその事を忘れてたみたいだな、私は）

ヒカリは心の中で反省し、サトシの方を見た。

しかし、其処に居たのは、ヒカリが知っているサトシではなく、髪も伸び、体格もしっかりとした成長した（少し、成長しすぎだが）サトシが夜空に浮かぶ月を見て微笑んでいる姿だった。

其れを見たヒカリが改めて思った。

自分は、この人が好きなんだと言う事に。

t o b e c o n t i n u e

## 第八話サトシとザンナーとリオンと序にマーズの出来事（後書き）

ヒカリの性格が少しばかり壊れた気がします。

すみません。>  
|<。

## 第九話ワールド・リーグ『序章』

襲撃者達とサトシの過去を話し終えたナツメは、サトシと共にパーティーの食事を食べていた。

すると、サトシが何かを思い出したかのように参加者全員を呼び集めた。

サトシ「あ、皆！、ちよつと集まってくれ！」

カスミ「何よ、サトシ、皆集めて」

全員の思っている事をカスミが代わって代弁した。

サトシ「実は、一カ月後にロイヤル地方でワールドリーグが開かれるんだ」

ハルカ「ワールドリーグ？」

ハルカの疑問にサトシが答えた。

サトシ「ワールドリーグって言うのは、カントー、ジョウト、ホウエン、シンオウ、イッシュ、ロイヤル地方の六つの地方からトレーナー、ジムリーダー、四天王、チャンピオン、フロンティアブレイン達を集めて開くポケモンリーグの事なんだ」

ハルカ「へえ、なんかすごいかも！」

サトシの説明を聞いていたハルカは納得しなぜか興奮しだした。

サトシ「俺、そのリーグに出る四天王達と知り合いで、カントーに一旦戻るって言ったら皆に招待状渡すのを任されたんだ」

そう言つてサトシは一人一人に招待状を渡して回つた。

シンジ「招待状だけか？」

徐にシンジが呟いた言葉にサトシは首を縦に振つた。

サトシ「ああ、参加はあつちで出来るからな、それと、リーグのルールだけどシンジ達はトレーナーの部に参加、シロナさん達はチャンピオンの部に、ジンダイさん達はフロンティアの部、カンナさん達は四天王の部、タケシ達はシムリーダーの部に参加するんだ」

シューティー「優勝者には何が与えられるんだ？」

サトシ「優勝者はトロフィーと賞金、其れから、ロイヤル地方のチャンピオンとのバトル、そのバトルにトレーナーが勝てば“ポケモンマスターの称号”が与えられるんだ」

『！？』

サトシの言葉に全員が驚愕した。

通常、ポケモンマスターになるには、16個以上のジムバッジを所持しポケモンリーグでベスト4の以上の成績を2つ以上残した者に、四天王との挑戦権が与えられ、その四天王に勝利した者にチャンピオンへの挑戦権が与えられそして、そのチャンピオンに勝利した者にポケモンマスターの称号が与えられる。



しかし、ワールドリーグでは、16個以上のバッチを持たなくても、リーグでベスト4以上の成績を残さなくても、四天王一人に勝てばチャンピオンへの挑戦権が与えられ、勝利すれば、ポケモンマスターになれると言う何とも簡単なルールであった。

でも、簡単ゆえにこれを機にポケモンマスターになろうとするセコイ奴らも出てくるだろう。

シンジ「この大会にお前も出るのか？」

シンジがサトシに質問した。

質問されたサトシは、首を傾げながら答えた。

サトシ「うーん、一余出る事は出る」

其れを聞いたシンジはサトシに背を向け、全員に分らないように笑みを浮かべた。

シンジ「そうか（この大会に出てればもつと俺はこいつ等と強くなれる。奴とのリベンジは其処で、果たす！）」

シンジは自分のポケモン達を見て心にサトシへの闘志がメラメラと燃え上がり始めた。

シューティー「（彼も僕と同じでサトシへのリベンジに燃えているんだな、でも、リベンジは僕が先にさして貰う！）」

マサムネ「（さっきのバトルでサトシがオイラより強くなったの

は分かった。けど、相手が強ければ強いだけオイラは燃えるんだよ！そして、サトシもオイラとポケモン達の気合いで必ず倒して見せる！」

サトシのライバル達はその心に新たな目標を建て、その目標に向かって進もうとしていた。

その光景を見ていたサトシは誰にも聞こえないような声で呟いた。

サトシ「待ってるぞ」

そう言つてサトシ何処か寂しそうな顔を浮かべた。

サトシ「オーキド博士、俺もう帰ります」

オーキド「もう帰るのか？少し早いんじゃないか？」

サトシ「リーグに向けて準備もありますし、それじゃ」

そう言つてサトシはトロピウスに乗って空の彼方に消えて行つた。

カスミ「オーキド博士、サトシは何処に行つたんですか？」

オーキド「サトシは帰つたよ、リーグに向けての準備をするといつておつた」

ハルカ「えゝ！？サトシもう帰つちやつたんですか！？」

ヒカリ「ひどゝい！何か一言言つてか行つてよね」

サトシが無断で（オーキドには言った）帰ってしまった事にカスミ達がブーブーと文句を言いだした。

シゲル「（サトシは準備のために帰ったって言ってたな、僕も負けていけないな）」

ヒロシ「（リーグに出れば、サトシとも決着をつけれるしチャンピオンに勝てばポケモンマスターになれる！これは、）」

シゲル・ヒロシ「（絶対に負けられない！！）」

こうして、止まったままの針が動き出そうとしていた。

t o b e c o n t i n u e d

## 第十話ワールド・リーグ『準備』（前書き）

今回は、かなり短く、おまけに出来が悪いかもしれませんが。

それでも、どうか暖かい目で御覧になってください。

## 第十話ワールド・リーグ『準備』

パーティーから早15日。

「ブラッキー！影分身！」

「ブラッ！」

此処、オーキド邸では、シゲルが相棒であるブラッキーと共にワールドリーグに向けての特訓に明け暮れていた。

「ブラッキー、少し休憩しようか」

「ブラッキー」

そう言っただけでシゲルは木の木陰に置いてあったポケモンフーズとミネラルウォーターを取り、フーズをブラッキーに与え、シゲルはミネラルウォーターを口に運んだ。

「張り切っておるなシゲル」

「お爺様」

シゲルに近ずいて来た人物はシゲルの祖父であるオーキドだった。

「ええ、頑張らねばならないんです。絶対に」

そう言っただけで、シゲルはミネラルウォーターの入ったペットボトルを持つ手に自然と力が入り、ペットボトルがグシャッと音を立てて拉

げて中の水が零れ出てしまった。

「サトシの事か・・・」

「ッ」

オーキドの呟きにシゲルは微かに表情を歪めた。

「図星のようじゃな」

「はい、2年前までは僕の方がサトシより強かった筈なのに、この2年でサトシは僕を追い抜いて行った。2年の間、僕だって遊んでたわけじゃない。研究の合間に、ポケモン達の訓練をしてましたし、ポケモン達の健康管理、技の相性、タイプ、特性、全てをやり直しました。でも、ポケモンバトルは知識だけじゃないと言うのは分かってます。それでも、僕は、ワールドリーグでサトシに勝たなければならぬんです。研究者として友人として、そして、好敵手として」

シゲルの瞳には揺ぎ無い信念と闘志が宿っていた。

其れを見たオーキドは、笑みを浮かべながらシゲルに近ずき、言った。

「シゲル、後悔の無いように、全力でサトシとぶつかるのじゃ」

「はい！」

そう言ってシゲルは再び特訓に戻って行った。

そして、所変わって此処、シロガネ山。

「レオン！十万ボルト！」

洞窟の中で黄色い光が発光し、暗い洞窟の中を輝かせた。

洞窟内では、野生のポケモン達と対峙している青年、ヒロシと相棒のピカチュウのレオンがいた。

「ハア、ハア、ハア、レオン、大丈夫？」

ヒロシの言葉にレオンは息を荒げながら頷いた。

「此れしきの事じゃあ、サトシには到底及ばない」

そう、ヒロシが此処まで拘るのは、ライバルであり、友であるサトシに勝つため、そのためにシロガネ山に15日も籠って、己とポケモン達を鍛えているのだ。

「ごめんね、レオン。無茶をさせて」

ヒロシの謝罪にレオンは首を横に振り、気にするなと言わんばかりにヒロシを見た。

「ありがと、レオン。よし皆！もう少しだけ頑張ってく！」

そう言ってヒロシは、腰に付いていたモンスターボールを全て投げ、手持ちのポケモンをすべて出した。

「僕等は、強くなって、ワールドリーグを勝ち抜くんだ!!」

ヒロシの叫びと共に、ポケモン達が一斉に動いた。

ワールドリーグまで、後15日。

t o b e c o n t i n u d e



## 第十一話ワールド・リーグ『黒影』

「ハア、ハア、ハア、ハア、」

暗い森の中。

その森の中を一人の男が息を切らせながら走っていた。

「ハア、ハア、ハア、クソ、！」

男は、“何か”を警戒しながら木の陰に隠れた。

「ハア、ハア、ハア、何で俺がこんな目に！」

そう男が愚痴つていると、ガサ、と目の前から足跡が聞こえ、バツ！と顔を上げると其処には、黒いローブを身に纏った人物が立っていた。

「それは、貴方がミスを犯したからかよ？」

そう言つて、黒いローブの人物は手に持っていた仕込み杖から剣を抜き、男の首に切っ先を付けた。

声からして、如何やら女のような声だ。

「た、頼む！もう一度、もう一度俺にチャンスをくれ！」

そう言つて男は女に頼み込んだ。

すると、その女は切っ先を男から離れた。

首から剣の冷たさが消え、男は安堵の息を吐いた。

すると、男は懷からモンスターボールを取り出し、その中から男のポケモン、クイタランが現れた。

「甘いんだよ！女！！」

そう言つて男は隠し持っていたナイフを取り出し、クイタランと共に女に襲いかかった。

「甘いのはそっちだ」

その声と共にさっきまで男の目の前に居た女がいつの間にか、男の後に居て、その手には血が付いた剣、その隣には暗くて見えないが女のポケモンらしき者が立っていた。

「え？」

女の持つ剣に付着している血を見て、男は自分の肩に目を向けると、其処にはざっくりと裂けた傷が自分の肩にあった。

「ぎゃあああああああ！！！！」

男の悲痛な叫びが暗い森に響き渡った。

「ク、クイタラン！ッ！？」

男が肩の傷を抑えながら自分のポケモンに指示を出そうと目を向け

ると、其処にはすでに息絶えているクイタランが横たわっているのが男の目に入った。

ザッ、ザッ、ザッ

女がジリジリと男に近づいて行つた。

「ま、待ってくれ！？た、頼む！命だけは！」

「聞く耳持たん」

そう言つて女は男目掛けて剣を、振り下ろした。

「うわああああああ！！！！」

再び、男の叫びが森に響き渡つた。

「フン、我らに失敗は許されない」

そう言つて女は剣を杖に戻し、男の死体を踏みつけようとした瞬間。

「死者を愚弄するな」

「！」

後か女の肩を掴んでいるのは、女と同じ黒いローブを身に纏った男が女を睨んでいた。

「あら、貴方も来たの？」

「嗚呼、死体の処理とあの方からお前へのミッションを伝えに来た」

「！」

女は男の言葉に目を見開いた。

「内容は我等をコソコソ嗅ぎ回っている国際警察の暗殺だ。ターゲットは年齢40代、身長170代、性別男、コードネームは“ハンサム”だ」

「変なコードネーム、まあいいわ、そいつを殺せばいいのね」

女の言葉に男はただ頷いた。

「サカキ無き今」

「我らの主の願い」

「「我らが叶えん」」

そう言つて二人はその場から去つて行つた。

side out

side ???

私の名はハンサム。

もちろん本名では無い。

私は国際警察に所属していて、本名を隠しコードネームである“ハンサム”を名前として使っているのだ。

今私はロイヤル地方に向かう飛行機に乗るため、イツシュ空港に来ている。

何故、ロイヤル地方に向かうのかと言うと、本部から任務が下ったのだ。

その内容は、短く、“ギンガ団より手ごわい組織が動き出そうとしているその組織の調査をせよ”との事。

ギンガ団より手ごわい組織、ギンガ団でもあれだけ手こずったと言うのに、それより手ごわいとなると、私一人で大丈夫だろうか？ふとそんな事を考えてしまう。

『ロイヤル地方行きの方が到着しました』

ん？来たか、そう思って私は座っていた椅子から立ち上がり、荷物を持って搭乗口に向かった。

「ん？」

ふと目の前を見ると、見た事も無い美しい女性が前から歩いて来た。

「おお」

いかん！いかん！これから任務だと言うのに、たるんでいるぞハンサム！

そう言って、自分の頬を両手で叩き、気合いを入れ直した。

コツコツコツ

コツコツコツ

歩き続け、その女性が自分の目の前に近づき、今にもすれ違いそうな距離まで来ると、突然、激しい痛みが胸を襲った。

「うっ、っ！？」

私は目を自分の胸に向けると其処には、自分の胸を突き刺すナイフとそのナイフを持つ、隣に立つ美女の手だった。

「な、ぜ？」

「これ以上我らの事を嗅ぎ回るな、出ないとまた誰かが、死ぬぞ」

「！？」

ザッ

コツコツコツ

女は、ナイフを抜き取り、そのナイフをポケットにしまい、出口に向かつて歩いて行った。

「奴、が、組織、の、し、かく」

出血する胸を抑え、携帯で本部に連絡しなければと、私は携帯を取りだし、本部の番号を押したが、其処で私は、倒れてしまった。

《はい、此方国際警察。もしもし、ハンサムさん？もしもし、ハンサムさん？》

電話の向こうでジュンサーさんの声が聞こえ、周りでは私の周りに人だかりができてるのが薄れ行く意識でもなんとか分かった。

そして、最後に覚えているのは、救急車の音が聞こえるだけだった。

t o b e c o n t i n u e d

## 第十二話ワールド・リーグ『開幕』（前書き）

大変長らくお待たせしました！

ポケットモンスターライト&ダーク&カオス、ワールド・リーグ、遂に開幕です！

では、御覧下さい！



## 第十二話ワールド・リーグ『開幕』

あれから、遂に一カ月が経ち、このロイヤル地方で、最強のトレーナーを決める大会。

『ワールド・リーグ』が開催される。

此処ロイヤル地方、ロンドシティでは、すでに全世界から勝ち残って来たトレーナー達が今か今かと会場内で開催を心待ちにしていた。

そして、漸くその時が来た。

『皆さん、わざわざ遠い所からこの大会に参加するために来てくださって、本当にありがとうございます。』

私は、ロイヤル地方チャンピオン、ツバサと言います。

この大会の式辞を、恐縮ながらやらせていただきます。』

そう言つて、ツバサは一度咳払いをしてから式辞を述べ始めた。

『これより、ワールド・リーグの開催を此処に、宣言します!』

『うおおおおおおおおお!!!!!!!』

ツバサの言葉と同時に観客と参加者全員が、雄叫びを上げ、会場上空に花火が上がりました。

『では、対戦表を、オープン!!』

ブン!

そう言うと、スクリーンに対戦表が現れた。

参加者はシゲル達を入れて合計20人。

『早速、第一試合を開始しましょうか。』

最初の試合は、カントー地方から、シゲル選手、ハウエン地方から、トウマ選手による試合です』

「最初の試合はシゲルさんか、ねえ、オーキド博士、シゲルさんがどんな手持ちか知ってます？」

観客席で見ていたマサトがオーキド博士に聞いた。

「いや、わしも知らん、じゃが、シゲルが選んだと言う事は、其れだけ強いと言う事」

オーキドの言葉にマサト達は再びバトルフィールドに目を向けた。

フィールドにはすでに来ていたトウマと、後からやって来たシゲルが位置に付いた所だった。

「これより、マサラタウンのシゲルと、ミナモシティのトウマによる、ポケモンバトルを開始する。

両者、最初のポケモンを出してください」

審判の言葉にシゲルとトウマは腰にあるモンスターボールを一つ取り、フィールドに投げた。

「行くんだ！カメックス！」

「ラグラージ！ready go！」

「ガメー！！」

「ロアーグラーー！！」

シゲルはカメックスを出し、対するトウマはラグラージを出した。

「それでは、専攻はシゲル選手で、始！」

「カメックス！ハイドロポンプ！」

カメックスの背中の中管からすごい勢いで発射された水が、ラグラージに向かって行った。

「ラグラージ！地震！」

トウマの命令でラグラージが地面に衝撃を与え、フィールドが大きく揺れ、カメックスはバランスがとれず転倒し、ハイドロポンプもラグラージに当たらず、空に向かって行き、消えて行った。

「ガメガメガメガメ！？！？」

転倒したカメックスは起き上がれずに身をジタバタさせていた。

「カメックス落ち着け！そのまま高速スピン！」

「ガメ！ガメメメメメー！！」

カメックスは手足と頭を甲羅に引っ込め、体を回転させてラグラージに向かって行った。

「ラグラージ！アームハンマー！」

「ラグラージ！」

ラグラージは右手を振り上げると、その右手が輝き始め、そのままこっちに向かって来たカメックスに向かって勢いよく振り下ろした。

ダアアアアン！！！！

激しい爆発が起き、爆雲が巻き上がり、フィールドを覆い隠した。

「カメックス……」

「ラグラージ……」

シゲルとトウマが自分達のポケモンの名前を呟いた。

「最大出力でハイドロポンプ！！！」

「全身全霊で滝登りだ！！！」

「ガメエエエエエエエ！！！！！」

「ラグラアアアジイイイ！！！！！」

黒雲が逆巻き、その隙間からハイドロポンプを放っているカメックスと、激流を身に纏ったラグラージが見え、両者の攻撃で再び爆発

が起き、又しても爆雲でフィールドが覆い隠された。

『激しい爆発が起こってフィールドが黒雲に隠され、どうなったのか判りません!』

実況の言葉が静寂している会場に響き渡った。

暫くして黒雲が晴れ、其処には互に睨み合っているカメックスとラグラージが居た。

「大会はまだ、始ったばかり」

「そう、簡単には負けないよ」

そう言って二人は再びポケモン達に指示を出した。

しかし、この大会の裏では……。

「おい、聞いたか？あの事……」

暗い廊下に男の声が木霊した。

「嗚呼、国際警察の一人が、刺客の襲撃を受けて意識不明の重体だ  
って」

男の質問に仲間の一人が答えた。

「奴らが、動き出した」

その言葉に、壁に凭れ掛っていた仲間の一人が険しい表情を浮かべ

た。

「大丈夫かい？」

心配した仲間が問いかけた。

「嗚呼、大丈夫、何時までも、引き摺ってられない」

そう言つて男は壁から離れ、仲間たちの顔を見渡してから、廊下の闇に向かって歩いて行つた。

「そろそろ、俺たちも動くぞ」

男の言葉に、全員が頷き、其々別の道に入り、消えて行つた。

t o b e c o n t i n u e d

### 第十三話ワールド・リーグ『シゲルVSトウマ』

「カメックス！ハイドロポンプ！」

カメックスの背にある管から水がラグラージに向かって発射された。

「ラグラージ！かわしてアームハンマー！」

ラグラージは放たれたハイドロポンプをジャンプしてかわし、そのまま落下を利用してカメックスに拳を叩きこんだ。

「カメックス！受け止めるんだ！」

「何！？」

シゲルの指示で、カメックスは放たれたラグラージの拳を受け止め、その光景を見たトウマは驚きを隠しきれずに叫んだ。

「そのまま投げ飛ばせ！」

「ガメ、ガアアアアアア！！！」

カメックスは掴んだ腕を振り回してそのままの勢いでラグラージを放り投げた。

投げ飛ばされたラグラージは観客席の囲いに激突した。

「カメックス！“あれ”をやるぞ！」

「ガメ！」

シゲルの合図にカメックスが強く頷いた。

「行け！カメックス！サンド・スピン・ストームだ！」

シゲルの叫びと同時に、カメックスは足手首を甲羅の中に引っ込め、そのまま体を回転させ、砂煙を巻き上げトルネードを作り、其れを身に纏いラグラージに向かって行った。

「ラグラージ！かわすんだ！」

トウマは叫んだ。

しかし、その叫び虚しく、ラグラージは砂塵の竜巻に飲み込まれた。砂煙が修まると、フィールドには立っているカメックスと倒れているラグラージが姿を現した。

『ラグラージ、戦闘不能！カメックスの勝ち！』

審判の声が会場内に響き渡ると、今まで静まり返っていた観客が歓声を上げ始めた。

『うわあああああああ！！！！』

「thank youラグラージ、ゆっくり休んでくれ」

そう言ってトウマはラグラージをボールに戻した。



「次は君だ！オオスバメ！ready go！」

その叫びと共にトウマは勢いよくモンスターボールを投げ、その中から光と共に翼を羽ばたかせながら空中を舞っているオオスバメが姿を現した。

「スバァ！」

オオスバメは空中で停止して、カメックスを睨みつけた。

「カメックス！ハイドロポンプ！」

「オオスバメ！影分身！」

カメックスの攻撃はオオスバメの影を貫いただけで終わった。

「カメックス！影のすべてにハイドロポンプ！」

「そう来たか、なら、オオスバメ！高速移動！」

再び放たれたカメックスのハイドロポンプはオオスバメの残像を全てかき消した。

しかし、その攻撃は本物には当たらなかった。

「クッ、一体何所に！？」

フィールド内を見渡すシゲル。

その様子を見ていたトウマは口元に笑みを浮かべた。

「オオスバメ！燕返し！」

「！？」

トウマの指示に反応したシゲルは、カメックスの方に目を向けると、其処には、燕返しが直撃し、ゆっくりとフィールドに倒れるカメックスの姿がシゲルの目に映った。

『カメックス、戦闘不能！オオスバメの勝ち！』

「ありがとうカメックス、君の努力、無駄にはしない！行け！スワンナ！」

シゲルはカメックスをボールに戻し、二体目のポケモン、スワンナを出した。

「オオスバメ！破壊光線！」

「スワンナ！冷凍ビーム！」

「スバアア！！！」

「スワアア！！！」

二体の攻撃が激突し、フィールドは黒煙に包まれた。

しかし、二人の指示は止まらない。

「オオスバメ！燕返し！」

「スワンナ！こっちも燕返し！」

ガン！

ダン！

ゴン！

会場に激しい音が鳴り続けた。

フィールドの黒煙が晴れると、二人は同時に叫んだ。

「オオスバメ！」

「スワンナ！」

「「ゴットバード！！ノブレイブバード！！」」

「スウウウバアアアア！！！！！」

「スウウウワアアアア！！！！！」

オオスバメとスワンナは光に包まれ、そのまま二体は空中で激突し、激しい光と爆発が起き、空から二体が真逆様にフィールドに落ちた。

『オオスバメ、スワンナ、両者戦闘不能！』

「thank youオオスバメ」

「スワンナ、よく頑張った」

二体をボールに戻した二人は、お互いに相手を見据えた。

「君、強いね」

「君こそ」

「フフフッ」

二人は笑い合い、三体目のポケモンをフィールドに出した。

「ダゲキ！ready go！」

「行け！ニドキング！」

「「メガトンパンチ！！」」

投げたボールから出た光から、二体は勢いよく飛び出し、互いの拳をぶつけた。

「ダゲキ！インファイト！」

「ニドキング！爆裂パンチ！」

ダダダダダダダ！！

二体は、互いに何打も何打も何打も拳をぶつけ合った。

「ダゲキ！ローキック！」

ダゲキはニドキングから距離をとり、其処からジャンプし空中で回転してニドキングの顔に蹴りを叩きこんだ。

ダアアアアン！！

激しい音が会場に鳴り響いた。

「今だ、ニドキング！爆裂パンチ！」

「やっぱりそう来たか、応戦だ！ダゲキ！メガトンキック！」

「ガアアアアアアアアアア！！！！！！」

「コアアアアアアアアアア！！！！！！」

二体の咆哮が会場内に轟く。

ダゲキは、空いている左足でニドキングの肩を蹴り、再び距離を取り、其処から再びジャンプしそのまま右足でニドキングの体目掛けて放った。

ニドキングは距離をとって、再び自分に目掛けて放たれた蹴りと同時に、右手にためていた力を解放し、渾身の力でダゲキ目掛けて右手の拳を放った。

ドツカアアアアアアアン！！！！！！

激しい爆発が起こり、再び会場を黒煙が包み込み、会場の観客達は、

唾を飲みながら黒煙の中を見詰めた。

静寂、会場を包んでいる静寂が破られた。

審判の言葉で・・・。

『ニドキング、ダゲキ、共に戦闘不能!!』

観客達の目線の先には黒煙が晴れたフィールドに、仁王立ちして気絶している二体の姿があった。

「ダゲキ、thank you」

「ありがとう、ニドキング」

そう言って二人は互いのポケモンをボールに戻した。

「次は、君だ！」

「行ってくれ！」

二人は四体目のポケモンが入ったボールをフィールドに勢いよく投げ、フィールドに光に包まれ、二体のポケモンが姿を現した。

t u b e c o n t i n u e d

# 第十四話ワールド・リーグ『新たな忠誠』（前書き）

長らくお待たせしました。

どろどろ、じいさん！

## 第十四話 ワールド・リーグ『新たな忠誠』

同時にモンスターボールを投げたシゲルとトウマ。

二つの光がフィールドに現れる。

「行け！ブラッキー！！」

「コマタナ！ready go！！」

「ブラッキー！！」

「コマタ！！」

シゲルのポケモンは、黒い体に円状の金色の毛が生え揃っていて赤い瞳が相手を睨むようにギランっと光らせる、ブラッキー

対するトウマのポケモンは、怪しく輝く鋼鉄の体、その腕には鋭利な刃、それを揺らり揺らりとチラつかせている、コマタナ

両者がポケモンを出したのを確認した審判が自身の両手に持つ赤と緑の旗を同時に勢いよく振り上げながら試合開始を叫んだ。

「始！！」

合図が聞こえると同時に二人は指示を出した。

「ブラッキー！電光石火！！」



「コマタナ！シザークロス！！」

ブラッキーは通常の電光石火を超える加速力で瞬時にコマタナに接近し、コマタナはそれを待っていたかのように両手の刃を交差させブラッキーにクロス型の斬撃を放った。

ブラッキーはそれをかわし、コマタナに向かってさつきと変らないスピードでコマタナに体当たりをした。

しかし、相手の体は鋼のように硬く、全くと言ってダメージがなかった。

だが、体当たりをしたブラッキーは鋼の体に体当たりしたせいで、頭にダメージが伝わり、少し怯む、その隙をトウマに見られてしまった。

「今だ！コマタナ！もう一度シザークロス！！」

トウマの指示に従い、コマタナは怯んだブラッキー目掛けて先ほどと同じクロス型の斬撃を放った。

ブラッキーが攻撃に気付いた時は、既に遅く、攻撃を受けた時だった。

「ブラッキー！！」

ブラッキーの耳に主の声が飛び込んだ。

ブラッキーはすぐに体制を立て直し、コマタナの攻撃に備え臨戦態勢をとった。

「よし、ブラッキー！穴を掘るだ！！」

「させるな！コマタナ！辻斬り！！」

トウマの指示を聞きコマタナがブラッキーに向かって刃を振り下ろしたが、時既に遅く、ブラッキーは地中に姿を隠した。

「くそ！コマタナ、気をつける」

先ほどのブラッキーのように身構えるコマタナ。

不気味な静寂がフィールドを包み込んだ。

と、次の瞬間！！

「ブラッキー！！行け！！」

シゲルの声と同時にブラッキーがまるで閃光のような速さでコマタナの足元から飛び出した。

「コマタナ！！」

「攻撃の手を休めるな！ブラッキー！そのままスピードスター！！」  
穴を掘るの衝撃で空中に舞い上がっていたコマタナが地面に落ちると同時に、ブラッキーがコマタナ目掛けて無数の光輝く星達を放った。

「コマッ！！」

コマタナの悲痛な叫びがフィールドに響き渡った。

しかし、次の瞬間、コマタナの体が光に包まれた。

「「!?!」」

『!?!』

突然のことに困惑・驚愕するシゲルとトウマ、そして会場の観客たちも他選手。

「こ、これは、まさか!?!」

そう、そのまさか、ついにコマタナが“進化”し始めたのである。

光とともに徐々に大きくなるコマタナの体。

そして、まだ光に包まれた状態のコマタナは、先ほどとはケタ違いのスピードでブラッキーに接近し、両手の刃で切り裂いた。

それと同時に、光が振り払われ、その姿が現れた、進化したコマタナ、改め、“キリキザン”の姿が。

「キリ、キザン・・・」

さっきまで小さかったコマタナからは、信じられないほどの覇気を感じたシゲル。

ザワザワザワザワザワ

「……………」

キリキザンはざわめく会場をよそに、自身の主であるトウマの元へと歩み寄った。

「キリキザン……………」

進化した仲間の名を呟くトウマ。

そんなトウマに、片膝を付き頭を下げたキリキザン。

その行動に会場全体が再び驚愕した。

「キリキザン……お前………」

キリキザンの行動、言葉にしくなくても、彼の主であるトウマには手に取るようにわかった。

彼と最初に出会った時も、彼は自身に頭を下げ、自身に忠誠を誓った。

今の彼は、あの時と同じく、自分に忠誠を誓った。

《貴方を私の主と認め、貴方様に忠誠を誓いましょう。貴方様の前に立ちふさがるものを私が倒しましょう》

彼の声が聞こえた気がする。

しかし、そんな事はどうでもいい。

今は、自身に新たに忠誠を立ててくれた彼のために、この試合に勝つことだけを、考えよう。

それが、自身<sup>トウマ</sup>が彼にできる事だから……

「よし！キリキザン！行こう！この試合、絶対勝つよ！」

「ザン！！」

トウマの掛け声に自身の声を載せたキリキザン。

その光景を先ほどまで見ていたシゲルとブラッキー。

「僕たちだった、負けないよ！行くぞ！ブラッキー！！」

「ブラッ！！」

彼らの胸にも、新たな友情の絆が芽生えた。

「ブラッキー！！シャドーボール！！」

「キリキザン！シザークロス！！」

爆発

衝撃

激戦

その三つの言葉が観客たちの心をよぎった。

ブラツキーのシャドーボールとキリキザンのシザークロスが激突し、  
激しい爆発が起き、会場を爆煙が包み込んだ。

黒煙の隙間から見え隠れする二体の姿。

その姿はまさに“炎龍猛虎”そのものだつた。

やがて煙が晴れると、そこには、互いに傷だらけの二体の姿があった。

「ブラッキー！！ギガインパクト！！」

「キリキザン！！ハサミギロチン！！」

ブラッキーはダメージを負っているにも関わらず、最初に見せたスピードは落ちるところかさらに速さを増しており、紫色の衝撃がブラッキーを包み込み、`good speed`の如く速さでキリキザンに向かっていった。

対するキリキザンは自身の両手をクロスし、向かってくるブラッキーを真つ二つにするかのような姿勢で向かってくるブラッキーを待った。

「行けええええええええええええええええ」

二人の叫び声とともに二体の技が激突した。

一瞬の激しい音。

そして、静寂。

技を放ち、そのまま固まってしまった二体。

しかし、審判は両手の旗を振り上げ、叫んだ。

「ブラッキー！キリキザン！共に戦闘不能！！」

その言葉が会場に響き渡った。

t o b e c o n t i n u e d

第十四話ワールド・リーグ『新たな忠誠』（後書き）

短くて済みません。

本当にすみません



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2312t/>

---

ポケットモンスターライト＆ダーク＆カオス

2011年10月21日11時59分発行